

鹿児島県の小学校における「書くこと」の教育史（1） －「南方綴方」の一考察－

原 田 義 則 [鹿児島大学教育学部（国語教育）]

The history of the Writing education of the elementary school of Kagoshima (1) － A Study of the southern Writing education of Japan －

HARADA Yoshinori

キーワード：「書くこと」の教育史、『鹿児島 国語教育』、「南方綴方」

1 問題の所在と研究の目的

現行の指導要領には、「書くこと」の学習指導として、報告文・観察文・記録文・説明文・紹介文・推薦文・手紙文・生活文といった実用的な文種や、詩・短歌・俳句・物語や随筆といった文化的な文種が挙げられ、目的に応じた文章が書けるように指導することが求められている。小学校の教科書を見ると、以前と比べて実用的な文章を取り扱う単元が増加している。子どもたちの「書く」活動は、益々充実してきているように見える。

しかし一方で、「指導法が分からない」という教師の声もよく聞く。稿者は小学校現場に20年間勤務していたが、例えば、生活作文の指導については毎年時間を取って研修するがよく分からない、とする教師が多かったと記憶している。加えて生活作文教材が、現行教科書に採択されることは少なく¹、教師も児童も「書き方が分からない」とすることが多い。こうした状況を反映してか、近頃では、高額の代金を支払い夏季休業中の課題として出された生活作文を代書してもらうサービスが登場したと聞く。多くの小学校教師は、複雑な気持ちで、この報道を聞いたことであろう。

小学校における「書くこと」の不振については本県においても課題の一つとなっている。鹿児島県教育委員会は、近年の全国学力調査の本県結果を受け、平成25年度に新しく「鹿児島学習定着度調査」を、県下の小5・中1・中2の全員を対象にして実施した。これは平成15年度から10年間継続された『基礎・基本』定着度調査を変更して、本県の児童が苦手とする「思考・表現」領域に関する問題を、全体の3割程度、新たに加

えたものであった。²

調査の4か月前には「思考・表現」の問題が含まれることが県下の全小中学校に通知され、25年度末に実施された。その結果は、次のようなものであった。³

【表1 国語科平均通過率】

	基礎・基本	思考・表現	全体
小5	74.6	51.9	67.3
中1	71.0	63.7	67.9
中2	66.4	57.6	62.6

もちろん、この数値がそのまま本県の学力の全容を表しているわけではない。問題の難易度や各地域の状況など、様々な条件を考慮することが必要だが、小学校における「思考・表現」領域の落ち込みは、何らかの課題があることを示唆していることも事実であろう。

更に、「思考・表現」における「書くこと」の正答率を調べると、58.8%という結果であり、他の領域と比較しても低い結果⁴であった。県教委は同報告書で、今後の改善点として、「自分の意見を書くこと」の指導法の充実を挙げている。この「自分の意見を書く」という行為は、何も意見文だけに特化されるものではなく、どのような文章を書く上でも求められるものである。

各小学校では、今後自校の実態に応じて「書くこと」の指導法改善を進めていくと思われる。その際、重要な観点として忘れてならないのは、これまでの本県小学校国語科教育における「書くこと」の指導の成果と、課題を明らかにしておくことで

あろう。

鹿児島県の小学校における「書くこと」の学習指導は、これまでどのような成果を挙げ、どのような課題を抱えているのか。これらを明らかにした上で、本県児童の実態を分析したときに、より効果的な学習指導法の構築が図れると考える。

そこで、本研究では鹿児島県下の「書くこと」に関する論考や実践記録を中心資料として取り上げ、その学習指導の歴史を振り返ることにより、鹿児島県の小学校における「書くこと」の教育の成果と課題を明らかにすることを目的とする。

なお本稿においては、昭和29年の発刊以来、県下の小学校で広く読まれ続けている『鹿児島国語教育』所収の昭和30年代初期の論考から、本県の「書くこと」の出発点と考えられる「南方綴方」についての考察を中心に行っていく。

2 研究の方法と内容

(1) 「綴方」と「作文」

戦後間もない学校現場での「書くこと」の学習指導は、当時の指導要領が新たに示した「作文」と、戦前の「綴方」の間で激しく揺れ動いていたと考えられる。このことについて、大内(1993)は次のように分析している。⁵

昭和22年版『学習指導要領国語科編(試案)』では、綴り方・作文は、「国語科学習指導の範囲」として次のように位置づけられた

- | |
|---|
| (1) 話すこと(聞くことをふくむ)
(2) つづること(作文)
(3) 読むこと(文学をふくむ)
(4) 書くこと(習字をふくむ)
(5) 文法 |
|---|

綴り方・作文は、「(2) つづること(作文)」というように、「(1) 話すこと(聞くことをふくむ)」に続いて2番目に位置づけられたのである。このことは、かつての輝かしい綴り方教育の伝統に比して、その「地位変更」を求めたものであった。(中略) 明治33年の小学校令の改正に伴って「綴り方」という独立教科名としての地位に

あったものが、この時点(引用者注:昭和22年版「学習指導要領国語科編(試案)」から、「作文」と改名され、しかも国語科の中で「聞くこと」「話すこと」「読むこと」と並んで、「つづること」(昭和26年版から「書くこと」となる)という言語活動として、有機的に関連させて指導されるものとなったのである。

大内氏は、このような変化について、「極めて大きな変化」とし、「戦時下の国民学校時代をくぐりぬけてきた戦前からの綴り方教師たちにとっては耐え難い変化だった」としている。⁶

本稿が対象とする『鹿児島国語教育』は、昭和24年に全県下の組織として結成された「鹿児島国語研究会」の機関誌である。大内氏の言を借りれば「極めて大きな変化」の波が押し寄せてきた時代であり、鹿児島県でも「綴方」と「作文」の差異について検討を重ね、それぞれの主義主張を背景とした学習指導が展開していったと予測される。しかし、いずれにせよ鹿児島県の「書くこと」の教育は、「綴方」から始められ、平成の現在に至るまでその流れは続いているように感じる。例えば、稿者が未だ新採の頃、「本県の作文指導は戦前の『南方綴方』から連綿と続く歴史を持つ」という話や、生活作文を対象とした「鹿児島県作文コンクール」(県教委主催)・「南日本作文コンクール」(南日本新聞社主催)等への出品を重視することを、先輩教師からよく聞かされたように思う。小学校では、現在でも「南方綴方」の名称が、現場教師の口から出されることがある。鹿児島県特有の「国語教師文化」として根付いているのかもしれない。

(2) 研究の方法

本研究では、鹿児島という「地域」に残されている資料を取り上げて研究を進めていくが、その方法の妥当性について先行研究を挙げ、確認しておきたい。

この方面の先行研究として、菅原(2004)が挙げられる。菅原氏は「地方的展開」に焦点を当てて研究する目的を、次のように述べる。⁷

これまで行われてきた作文・綴り方教育史研究の視点を類別すると、それは、大きく、成立史あるいは展開史としてとらえる運動史的研究、時代を代表する著述を到達点として取り上げる解題的な研究、特定の問題意識に基づく問題史的な研究の三つに類別することができる。しかし、それらのいずれにおいても、意図的・目的的に執筆された実践及び理論の記録、実践の中で活用することを意図して産出された様々な形の印刷物、児童が既述した文章及びそれらを掲載した各種の文集をはじめとする第一次資料の発掘が十分ではなく、また、運動、実践、理論、および成果の観点から、その全容を具体的・全体的に記述するには至っていない。

菅原氏は、上記したことを踏まえ、兵庫県下の「第一次資料」を発掘・分析した。そして、兵庫県下における戦後の作文・綴り方教育が、国分一太郎、無着成恭らの全国的な動向の影響を受けつつも、反対に、兵庫県の実践家である戸田唯巳、東井義男らにより、戦後日本の作文綴り方教育理論や実践に大きな影響を与えることになった点を明らかにしている。

菅原氏が、ここで採用した「第一次資料の発掘・分析」から「地方的展開」の実相を明らかにするという方法は、「南方綴方」と「作文」が撚り合いながら展開してきたと予測される、本県小学校の「書くこと」の教育史を紐解く上で、有効な手段だと考える。そこで本研究では、県下の国語研究団体の機関誌を中心的な資料として据え、分析・考察を進めていく。

(3) 本稿の内容

本稿においては、戦後すぐに本県下の国語人が集まり発足させた「鹿児島県国語教育研究会」の機関誌を取り上げ、本県の「書くこと」の教育の出発点と目される「南方綴方」に焦点を当て考察していく。

また、本県の小学校に長年従事してきた私自身の実感も大切にすることで、その実相を明らかにしていく。

3 鹿児島県国語教育研究会機関誌『鹿児島 国語教育』について

(1) 『鹿児島 国語教育』の刊行経過

本稿が対象とする資料は、鹿児島県国語教育研究会が発刊した、『鹿児島 国語教育』である。管見では、県下で戦後間もなく発刊された国語教育誌は、これが唯一のものであったと思われる。当時の様子を概観するために、昭和30年代に刊行された、第2号から第17号の刊行経過を表にまとめてみる。なお、機関誌に投稿された論考は、基本的に全て掲載されていた。

【表2：昭和30年代の鹿国研】

名称	鹿児島県国語教育研究会（鹿国研）
結成	昭和24年春（敗戦の4年後） 「鹿児島県国語文化研究会」から発展。 更に昭和30年7月には姉妹団体として「鹿児島県作文教育研究会」（会員120名）が発足。 （『鹿児島 国語教育第3号』「編集後記」・『鹿児島 国語教育第4号』吉嶺勉「南方綴方史」より）
事務所	鹿児島大学教育学部国語研究室
会員	鹿児島県下の各種学校に在職する国語教師及びひろく国語教育に関心をもつ人々
会員数	S 25年末 102名 S 28年末 185名 S 31年末 350名 S 40年末 700名
目的	1 国語教育に関する講演会研究会の開催 2 機関誌その他の発行 3 国語的環境改善への協力 4 その他必要なことから
顧問	蓑手重則（鹿児島大学教育学部）
機関誌	・『鹿児島 国語教育』（年刊） ・『国語通信』（年3回） ※なお、『国語通信』については第10号から『国語教育』に一本化され、5月、9月、1月に発行されることになった。

【表3：昭和30年代の『鹿児島 国語教育』】

号	発行年月	全頁数	全論考数	作文教育関係論考数	備考 (テーマ特集)
2	29.6	87	28	1	特になし
3	30.5	100	33	3	特になし
4	31.6	162	31	31	作文指導
5	32.6	124	28	0	読解指導
6	33.6	220	24	0	共通語指導
7	34.12	136	19	3	10周年記念号
8	35.6	103	23	3	学習指導案
9	36.5	92	26	9	指導事例集
10	37.5	98	22	6	実践記録集
11	37.11	84	15	5	実践記録集
12	38.3	121	40	2	文芸特集号
※本号には「第8回鹿児島県作文教育研究会」の論考が初めて寄せられている。					
13	38.6	58	11	2	特になし
14	38.11	74	8	2	
※宮内一正氏が「作文教育私論」とする論考を発表し、他会員に紙上討論を呼び掛けている。					
15	39. .3	103	17	9	
※「第9回鹿児島県作文教育研究会」の論考掲載					
※前号の宮内氏の呼びかけに対して、本号では3篇の論考が寄せられた。しかし、これ以降この討論が展開されることはなかった。					
16	記載なし	78	15	5	特になし
17	39.9	100	11	3	特になし

上記のデータから、当時の「鹿国研」の隆盛ぶりが窺える。稿者は、平成元年のみ「鹿国研」に参加したが、その時代にさえ「鹿国研に非ずんば

国語教師に非ず」と聞かされていた。その機関誌『鹿児島 国語教育』は、当時重要な位置を占めるものであったと推測される。

掲載された論考数を単純に計算すると、昭和30年代の全論考数351本に対して、作文教育関係の論考数は84本であり、全体の約24%である。第4号の「作文指導特集号」を除外すると、約16%になる。また、第12号・第15号には昭和30年に「鹿国研」の姉妹団体として結成された「作文教育研究会」による論考や、作文教育に関する紙上討論の呼び掛け等があり、少数ではあるが安定した応募状況であったことが分かる。

(2) 『鹿児島 国語教育』所収の作文教育関係論考の分類

昭和30年代に発行された第2号～第17号に掲載された論考は、一つの論題でまとめられているものも多いが、複数の論題が含まれているものもある。しかし、本稿では論考の強調点に着目して、可能な限り分類し、一覧表にまとめてみた。なお分類のカテゴリーは、9種類に設定した。

【表4：掲載された作文教育関係論考の分類】

号	A	B	C	D	E	F	G	H	I	計
2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
3	0	1	0	0	0	0	0	0	2	3
4	1	1	0	0	1	6	3	13	6	31
5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3
8	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3
9	1	0	0	0	1	1	0	5	0	9
10	2	0	0	1	1	1	0	2	0	6
11	0	0	0	0	0	2	0	3	0	5
12	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
13	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
14	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2
15	0	0	0	0	0	0	0	2	7	9
16	1	0	0	0	0	1	0	2	1	5
17	0	0	0	0	0	2	0	1	0	3
計	5	3	0	1	4	16	3	30	22	84

※ A～Iは次の内容を指す。

- ・ A 構想・取材・構成に関する論考
- ・ B 記述に関する論考
- ・ C 推敲に関する論考
- ・ D 共同批正に関する論考
- ・ E 評価に関する論考
- ・ F 文種ごとの指導に関する論考
 - ※ 当時の論考で扱われた文種は、写生文・日記・感想文・詩・童話・行事・壁新聞の7種類である。
- ・ G 作文集（学級文集等）の作成について
- ・ H 学年の発達段階に応じた作文指導論
- ・ I 作文教育論

全84本を分類すると、「H 学年の発達段階に応じた作文指導論」の30本、「I 作文教育論」の22本に次いで、「F 文種ごとの指導に関する論考」が16本となっている。特に、Fのカテゴリーが、全体の約20%を占めている注目したい。

前述したように、戦後は児童の「生活」を対象にした「綴方」から、多様な文種を指導する「作文」や「書くこと」への変更が求められた時代である。Fのカテゴリーが、全体の約20%を占めているという状況は、鹿児島県下において、「作文」や「書くこと」への「変化」が熱心に進められていた結果であろうか。

もちろん、『鹿児島 国語教育』寄せられた論考の本数が、そのまま当時の本県作文教育の全容を表しているとは思えない。しかし「鹿国研」には、県下全域から発足から約10年間で700名を超える会員が参加し、その機関誌は現場で大きな影響力を発揮したと思われる。掲載された時期や本数は、何らかの意味を持つものとして捉える方が自然であろう。当時の小学校現場において、写生文・日記・感想文等の多様な文種に応じた学習指導が、熱心に進められていたことが目に浮かぶのである。

しかし、一方で疑問が湧く。「南方綴方」である。小学校現場において「南方綴方」と「作文」は、どのように燃り合わさっていったのか。次項ではこの疑問を解決すべく、『鹿児島 国語教育第3号』（昭和30年5月発行）に寄せられた田坂誠喜氏の論考を基に、「南方綴方」について考察を進める。

4 「南方綴方」の様相

(1) 「南方綴方」の誕生

本研究会の結成時期や状況については、『鹿児島 国語教育第3号』（昭和30年5月発行）の「編集後記」（同書P 100）から、知ることができる。

想えば昭和24年春、この会を結成してから、「国語教育」「国語通信」ともにすくすくと成長してきた。焦土の跡にこのような若い芽が伸びていったことは、戦前の田坂先生の御指導に負うところが多いであろう。今回、16年ぶりに先生を鹿児島に迎えることができるのは大きな喜びである。

この「編集後記」で触れられている田坂氏については、新名主健一「鹿児島県国語教育史（VI）－磯長武雄研究ノート－」（鹿児島大学教育学部紀要教育科学編、1989）に詳しい。それによると田坂誠喜氏は、明治39年生、昭和61年没。昭和9年には鹿児島第一師範に赴任し、昭和14年新潟師範に転職している。昭和17年に生活綴方運動のリーダーとして検挙されるが、昭和22年に新潟大学に復職、昭和26年に青山学院大学へ転職、昭和36年同大学教授、と紹介されている。田坂氏は、戦前から鹿児島県の国語教育に携わってきた経験から、次のような原稿を『鹿児島 国語教育』に寄せている。⁸

（前略）そしてこの運動（引用者注：生活綴方運動）の主流をなしたものは東北の凶作的生活環境にあえぐ児童とその教育に取り組んだ教育者たちによるものであるように偏狭で無知な官憲が解釈したのも誤りであるし、生活綴り方の運動を北方人のみの独占運動であったかのように遡って自負する北方系の綴り方人の自負にも誤りがある。北海道や岩手、宮城、山形、新潟などの（中略）熱意のあるすぐれた北の人々の動きと共に、鳥取、岡山、福岡、長崎、宮崎、鹿児島などの（中略）南の人々の生活綴り方運動発展への寄与はその実践資料が大きく物語っている。

「あの頃」と題された田坂氏の巻頭言では、本県では戦前から綴り方運動が盛んであったことが述べられている。特に、昭和6・7年頃から、昭和12・13年頃の「真剣な討議」の様子を次のように紹介している。⁹

(前略) 古い文章を解釈し、名文を模倣して型通りの文章を作らせることを国語教育の使命と考える類の保守的な人々には個人の尊厳だの、社会的生活組織をいい、生活経験を中心としてよりよい生活より明るい社会の構築などを唱える新しい生活綴り方は危険極まりないものにも見えたに違いないが、こうした生活綴り方こそ現場の場に立つ良心的な教育の実践として(中略)若い真摯な教育者の関心をあつめ、有為な教育者が綴り方教育の研究と実践に全力を捧げて、こどもたちとその新しい将来のために調査し研究し、鉄筆を走らせて文集のための原紙をきり、綴り方の研究会を通して教育というもののある方について真剣な討議が交わされたのであった。

さらに、「あの頃」には、戦時中の弾圧によって資料が散逸してしまったことを断りつつ、具体的な実践内容についても触れている。¹⁰

(中略) 生活主義綴り方、調べる綴り方、科学主義の綴り方、郷土主義の綴り方、生活行動の綴り方、学習の綴り方、さては綴り方大衆化の問題、童心主義綴り方、花鳥風月趣味綴り方の批判、感性、知性、意欲性モラル等に関する諸問題、文集工作に関する研究等地方の無名の熱心な若い教育者の手によって問題が提示され、討議されて生きた現実の社会とこどもたちの生活の前進のための理論と実践とが成長して行ったのである。

「あの頃」を見る限り、本県において綴り方教育が熱心に展開されていたことが分かる。これらの状況について、田坂氏が幾度も論考の中で名前を出していた鹿兒島尋常小学校の副田凱馬¹¹氏は、昭和31年6月に発行された『鹿兒島 国語教育

第4号』において次のように述べている。¹²

まだ誰も通っていない真新しい雪の道を最初に行く者の心にも似た気持ちで、昭和9年12月、私たち「鹿兒島尋常小学校」編集部が日本の綴り方教育界に送った、「我等の学園学習の綴り方号」は意外に反響を呼んだ。(中略)中央の先生方が一様に「何も『学習の綴り方』は鹿兒島小学校、或は副田氏創り始めたものではないが」と、一応その「最初の人」ということは保留しながら、「最も正しい綴り方」として称讃し、今後の発展を期待されたのである。

副田氏が述べる児童詩文集「我等の学園」については、新名主(1987)に詳しい。¹³それによれば、同誌は「明治38年10月に創刊」し、その後「明治・大正・昭和にわたり、少なくとも、147号もの刊を重ねた学校詩文集」であり、「磯長武雄氏が学校詩文集としての体裁を整え」その後同氏が「科学的綴り方号」を特集し、外園郁也氏が「調べた綴り方」を特集し、「この後『学習の綴り方号』が特集された」とある。

この「学習の綴り方号」に収められた作品は、副田氏によれば、「中央の先生方」から、「最も正しい綴り方」という評価を受けたという。実際に掲載されていた作品については後述するが、副田氏はこれらの作品について「戦前のイデオロギー的バクロ(ママ)的な『生活綴り方』と対照的な存在であった」(同書P19)とし、「自然的に『南方綴り方』の主張をし、旗として認めるようになったのである。」(同上)として、「南方綴り方」の誕生を述べている。

そして、「北方綴り方」と「南方綴り方」の相違点について多くの分量を割き述べているので、以下にまとめてみる。¹⁴

・戦前の綴り方について

全国的に「調べた綴り方」、「科学的綴り方」が盛んであった。成果として、それまでの無自覚、無意識的な児童の作文態度を、意識的に対象について科学的客観的に調査し綴らせることができたこ

とがある。しかし、極端に言えばそこには、作者が登場していなかった。

・「北方綴方」について（戦前）

戦前の北方綴方人が旗を揚げた「生活綴方」はその対象が、児童の生活に向けられており「貧乏生活のバクロ的描写であった」とする。

・「北方綴方」(戦後) について

無着成恭氏『山びこ学校』（昭和26年発行）によって、飛躍的に前進した。この時から、北方綴方は、単に書き綴るために対象を調査・研究した「調べた綴り方」、「科学的綴方」としての立場から脱却して人間の生活態度を問題にし始めた。

・「南方綴方」について（昭和9年）

「学習の綴方」の作品集『我等の学園 学習の綴り方号』を出発点とする。その主張は、人生の真理を求め、問題に立ち向かう人間の成長を取上げて、励まし語る綴り方とする。それは「調べた綴り方」や「科学的綴り方」とは違い、作者が登場する綴り方である。その方法として、前進する児童生徒の生き方を、生活態度を、記録して吟味し、学習することによって、更に一段とその生活態度を高めていこうとするものであった。したがって、「南方綴方」とは、全教科学習の中に綴り方を定位させ、表現技術と児童の生活を拡充していこうとするものである。

副田氏による、これら定義づけの適否の検討については、別の機会に譲る。ただ、「南方綴方」の実相を捉える上で、看過できない点がある。それは、「学習の綴り方」の作品集である『我等の学園 学習の綴り方号』を出発点とした、という点である。『学習の綴り方号』に掲載されていた作品は、実際どのようなものであったのか。『我等の学園』から児童作品を引き、考察を進める。

(2) 「南方綴方」の児童作品

作品が掲載されていた『我等の学園』は、新名主（1987）の言うように他号の発行年数を基に逆算すると、第130号を指していると考えられる。しかし、この号は現在未収集のため、本稿では『我等の学園132号 学習の綴り方』の「作文集 第二部」（複製、表紙に「副田」の印有）を対象と

する。なお、第一部は一般作品であるため対象としない。

さて、第二部に掲載された各学年の作品題名は、次のようなものであった。また2年生以上には、学年ごとのテーマが付けられていたので、併せて紹介する。

【表5：『学習の綴り方』に掲載された作品題】

学年	組	題名
1	1	オトウサンノツクエノウエ
	2	ボクノウチ
	3	オカアサンノコト
	4	タイワンノコト
	5	ダイドコロノオハナシ
	6	ミセノコト
	7	オダイドコロノオハナシ
2		すきなべんきょう
	1	かうかう
	2	よみかたのべんきょう
	3	さんじゅつのおべんきょう
	4	しやうか
	5	こうま
	6	手工
3		讀方のふくしう
	1	讀方のふくしう
	2	天照大神
	3	朝顔
	4	かん字の勉強
	5	たん文の勉強
4		學習の綴方
	2	修身の綴方
	3	理科の時間
	4	そろばんのけいこ
	4	書方
	5	クロッキー
	6	讀方の學習
5		學習法の綴方
	1	うちでの算術學習
	2	國史の勉強
	3	地理學習法

	4	修身の學習
	5	蚊卵發見の苦心
	6	讀方の學習
	7	始めてのお作法
6	調べた綴り方	
	1	新校舎愛護法
	2	夏の遊び
	3	夏の物語
	4	梅雨の研究
	5	夏の草花
	6	夏の野菜

作品の題名から分かるように、自分の生活を対象にしたと考えられる作品は、第1学年のみであり他学年の作品は、各教科の学習内容や状況を書き記したものであった。例えば、2年生と、4年生の作品は、次のようなものであった。¹⁵

かうかう (尋ノ二 一ノ組)

このまへ、しゅうしんのじかんに先生からかうかうといふおはなしを、をしへて、もらいました。あるところに、おふさといふ女の子がありました。大そうちがびんぼうで、くるしんでました。おとうさんが、山へしばかりに行つて、かへりがおそくなるとおふさは、しんぱいしておでむかいに行きました。(中略) 私もかうかしておふさのやうにえらくなりたいとかがへました。

(指導者 有村先生)

書方 (尋ノ四 四ノ組)

僕は四年生になつてから書方が三年よりもずつとうまくなつたとおもう。そのわけは、山田先生がたいへんおもしろく教へて下されるからである。書方は一週間に月曜日、水曜日、金曜日の三時間で一日おきにある。はじめの中はどうぐをわすれる人もゐたが今一人もゐない。書方の前の休み時間は遊ぶのをやめて、皆一生けんめいすみをやる。もう前のやうにすみをこぼしたりさわいだりする心がけの悪い人は一人もゐない。用紙は學級でまとめて買って、まわりに二枚ぐらいづづくばること

になつてゐる。(中略)

僕は大きくなつたら書方の大先生のやうなえらい人にならうと志しを立ててゐる。

(指導者 山田先生)

2年生の「かうかう」は、その内容のほとんどが修身の時間に学習した、孝行話の粗筋を書いたものである。また、4年生の「書方」も授業の様子を書き綴つたものである。ちなみに、この「書方」という作品については、副田氏が「これはよく出来た」と評価している。¹⁶

さて、一読して分かるように、いずれの作品も自分の暮らしぶりを対象にしたものではない。また、この文集に掲載されたものが、一覧表から予想されるように、各組の代表児童のものであることから、これらの作文が副田氏の言う「全教科学習の中に綴り方を定位させた」、「学習の作文」の典型として捉えられる。

また、1年生の作品も、題名から予想される生活作文とは、随分と様子が違つたものであった。¹⁷

ダイドコロノオハナシ (尋ノ一 五ノ組)

- 1 ダイドコロニハ、カスコンロガーツアリマス。
- 2 ダイドコロニハ、オヒツガ三ツアリマス。
- 3 ダイドコロニハ、オササラガタクサンアリマス。
- 4 ダイドコロニハ、ホウチャウガ三チヤウアリマス。
- 5 ダイドコロニハ、マナイタガーツアリマス
- 6 ダイドコロニハオコメガアリマス。

(中略)

- 20 ダイドコロニハ、オミソガアリマス。
- 21 ダイドコロニハ、オシヨウユガアリマス

(指導者 池田先生)

1年生の作品は、「番号作文」と呼ばれるものである。「番号作文」は、副田氏が昭和8年に考案したもの¹⁸で、「書くことがない」「書き方が分からない」とする児童に対して、見たことをそのまま箇条書きの形で、記録するように綴らせていく方法である。現在では、番号を付されることはないが、見たことを順に書いていく「見たこと作文」

として、入門期の指導として用いられる。

すなわち、「南方綴方」で求められた作品は、「戦前のイデオロギー的バクロ的な北方綴方」とは違い、置かれている物を記録・報告する文や、各教科学習の様子を説明する文などであり、多様な文種を包含していたことが分かる。

では、副田氏が言う「作者が登場する綴方」とか、「前進する児童生徒の生活態度を、更に高めていこうとするもの」といった内容は、作品のどこに込められているのか。再度、副田氏の発言に着目してみよう。

(3) 「南方綴方」の実相

後年、「南方綴方」について、副田氏は次のように述懐している。¹⁹

「南方綴方」という呼称は、鹿児島県綴方教育研究会結成の母体となった鹿児島国語懇話会の、田坂誠喜氏宅における夜の集いの席で「北方綴方に対して『南方綴方』の旗を上げたら」と発言したわたしの言葉が、その始まりであったと思う。それ以前に「南方綴方」という言葉を語った人をわたしは知らない。（中略）「その南方綴方の主義主張は？」と尋ねられた時、わたしは「生命を育てる綴方」と答えた。――南の国鹿児島は、生々とみどりの生命の育つところ。年中青々と草木の生い繁るところ。生命を育てる太陽の輝くところなどと、それからみんなの話は弾み（中略）そのような方向に気を揃え、手をつなぎ、力を結集しようと、その後の運動などをいろいろと話し合ったことであつた。しかし、「学習の綴方」を柱にしたのは、わたしの南方綴方であり、磯長氏には磯長氏の、田坂氏には田坂氏の、みんなそれぞれに自分の「南方綴方」の柱を立てていたのであるが、その根底に何れも「みどりの生命を育てる綴方」という教育精神を踏まえて営まれていたというところに「南方綴方」があり、百花咲き競う綴方の花畑が開かれたのである。

（下線部：引用者）

下線部にある「みどりの生命を育てる綴り方」とは、前述したように、「北方綴方」を意識しての発言だと考えられる。すなわち「綴方」によって、貧しい生活を暴露するのではなく、「前進する」生き方や生活態度を書くことによって、「更に一段とその生活態度を高めていこう」とすることを目指したのである。

これらの知見をもって、再び、「学習の綴り方号」に掲載された作品を読むと、2・4年生作品の文末に書かれている、「えらい」という言葉が浮かび上がってくる。

2年生の「えらくなりたい」、4年生の「えらい人になろうと志を立てる」という言葉の意味は「孝行娘になりたい」、「書道を的確に指導できる先生になりたい」という意味である。つまり、子どもたちは、教科の学習を通して、前向きな意欲や夢を持つようになったことを綴っているのである。副田氏が「これはよく出来た」と評価している、真の理由が見えてくる。

この他にも「生活態度を高めていこう」とする作品は多く、例えば副田氏自身が指導し、学級会の様子を綴らせた、6年生の「新校舎愛護法」という作品には、「とにかくどんな良いことを決めてもみんながそれを実行せねばだめである。（中略）新校舎は僕の手でやろうと思ふ。」といった記述が見られる。「南方綴方」で子どもたちに綴らせた主題は、「バクロ的」なものではなく、明るく前向きなものであつたのである。

5 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

鹿児島県小学校国語教育における「書くこと」の教育史を考察していく上で、「鹿国研」の機関誌『鹿児島 国語教育』を中心資料としながら、今もなお、その影を残す「南方綴方」について考察してきた。その結果、次のようなことが明らかになった。

まず、文種の側面から見ると、番号作文や教科学習の作文などを含む、「百花咲き競う綴方」であつた。言い換えると、「南方綴方」は誕生当時から「作文」や「書くこと」と共通する考えを持つ「綴方教育」であつたのだ。したがって、昭和30年代

に『鹿児島 国語瀬教育』に寄せられた様々な文種の指導法は、国に影響された「大きな変化」ではなく、むしろ国に後押しされるように自ら抱き続けてきた課題を解決すべく生まれた実践だと予測される。これについては、当時の具体的実践例を挙げて、別の機会に考察したい。

次に、「南方綴方の主義主張」という側面から見ると、吉嶺勉が「南方綴方史」²⁰で「北方の暗さに対してわれらは『明るさ』を主張する」と述べたように、「北方綴方」で表された「現実を直視する態度」に重ねて、前向きに成長していく子どもの姿を描き出そうとするものであった。

これらの2点を踏まえ、副田氏は前述のように『南方綴方』とは、表現技術と児童の生活を拡充していこうとするもの」と謳ったのである。

この流れは、以降、鹿児島県下の小学校実践に大きな影響を与えていったと考えられる。

(2) 今後の課題

副田氏らが示した、「南方綴方」の主義主張や、児童作品に関する資料は残っているものの、そのプロセスについて記したものは、現在発掘中である。今後の課題としたい。

注

- 1 平成10年告示の学習指導要領には、「作文」という用語がなくなり、これ以降、対象や目的に応じて多様な文種を使い分けることが鮮明に意識されることで、教科書には、記録文、報告文、説明文等を書く活動が、多く組み込まれてきている。
- 2 鹿児島県教育委員会義務教育課 (<https://www.pref.kagoshima.jp>)「『基礎・基本』定着度調査から鹿児島学習定着度調査へ」
- 3 同上ホームページ「平成25年度鹿児島学習定着度調査結果(概要)」
- 4 同上ホームページ「各教科の内容・領域別、観点別正答率比較と課題」
- 5・6 大内善一『授業への挑戦95 戦後作文・生活綴り方教育論争』、明治図書、1993、P23
- 7 菅原稔『戦後作文・綴り方教育の研究』、溪水

社、2004、P5

- 8・9 田坂誠喜「あの頃」『鹿児島 国語教育第3号』、鹿児島県国語教育研究会、代表兼手重則昭和30年5月、P2
- 10 同上、P3
- 11 副田凱馬(よしま)氏については、新名主健一「鹿児島県国語教育史資料-その1-副田凱馬 著書目録」(鹿児島大学教育学部研究紀要、教育科学編41)、1990)に詳しい。以下、主要なところを引くと、「明治39年生、昭和63年没、昭和55年博報賞受賞」、番号作文の提唱者、南方綴り方推進のリーダー。
- 12 副田凱馬『『学習の綴方』を語る-南方綴り方の前進のために-』『鹿児島 国語教育第4号』鹿児島県国語教育研究会、代表兼手重則、昭和31年6月、P17~P21
- 13 新名主健一「鹿児島県国語教育史研究監」-「我等の学園132号」を中心にして-、(鹿児島大学教育学部研究紀要、教育科学編38)、1987)
- 14 副田凱馬『『学習の綴方』を語る-南方綴り方の前進のために-』『鹿児島 国語教育第4号』、P17~P21を稿者が、縮約したもの。
- 15・16・17 鹿児島尋常高等小学校「我等の学園132号 学習の綴り方」(複製、鹿児島大学原田研究室所蔵)から抜粋。
- 18 副田氏は自著「ばんごう作文」(南日本教育図書出版、昭和47年、P49)において、「わたしが始めて番号作文を考えたのは、昭和8年のことでもあります。」と述べている。
- 19 八木三郎、吉嶺勉、田代徹也共著『南方三人衆』、村田印刷工業株式会社、昭和49年、P382~P383
- 20 吉嶺勉「南方綴方史」『鹿児島 国語教育第4号』、P22~P26